

特別企画セッション「伝えよう！実践研究」

西川寛之（明海大学）・岩田夏穂（大月短期大学）

1. 本企画の趣旨

本セッションは、実践研究フォーラム第10回の開催を記念し、委員特別企画セッションとして「始めよう！実践研究」と並んで企画されたものである。

本フォーラムにエントリーされる実践研究の報告の中には、記述内容の不十分さゆえに、その実践を発信しようとした意図が伝わりにくく、そのままでは採用がためられるケースがしばしばある。日々の実践の成果を自分の現場の仲間だけでなく、他の専門分野や研究領域の実践者・研究者に向けて発信し、何らかの貢献をしたいと考えたとき、単に実践したことを説明するだけでは、その意義は伝わらない。本セッションは、実践研究を他者に伝える際に求められることを、参加者がイメージできるようになること、それを目指した企画である。

そのためのトピックとして、次の2点に焦点を絞った。まず、実践研究を発信する際には、(1) **研究における成果を、他者に様々な形で活用・応用・利用可能なもの**として提示する、ということである。実践研究は報告ではなく“研究”であり、社会的に貢献するという役割がある。たとえば、自分の研究成果は、他者の教材作成の有効な資料となりうる。

次に、(2) **研究手法の多様性に目を向け、自分が明らかにしようとしていることと研究手法の妥当性**を検討するという点である。実践の目的と研究の目的・位置づけを意識化し、研究手法を吟味し、整合性のあるものにする必要がある。

以上をまとめると、次のようになる。ある実践の成果を、次の実践のために利用可能なものとして、他者に伝えるためには、①その実践がこれまでの先行研究の流れの中でどのように位置づけられているのか、②どのような研究手法を使い、どのようなプロセスを経て、結果が得られたのか、そして、③その結果からどのようなことが成果（知見）として導き出されるのかを示すことが重要である。これらの情報があって、初めてその実践の内容と意義が他者に伝わり、その成果がさらなる実践研究の展開に貢献することが可能となる。

そこで、本セッションの内容をつぎのようにデザインした。まず、これまでの実践研究の流れにおいて、どのように知見を他者と共有してきたかを確認し、さらに一つの事例研究に焦点を絞って、それが「研究」として発信可能な形になっていく過程をたどる。それによって、上記①～③について参加者が検討できるようにした。続いて、実際に参加者が自分の実践を他者に伝えるためのプランを作成する活動を配置し、上記①～③の内容を具体的にイメージできるようにした。

2. 本セッションの流れ

当日は、16名の参加があり、現場の対象者や関心領域（留学生の予備教育、地域の日本語教育等）によって3人程度のグループに分かれてもらった。

活動は、フォーラム委員からの実践研究全般の議論（【セクション1】）と実践研究の事例紹介（【セクション2】）を行った後、参加者同士で実践研究発信のための具体的手順を

考えるグループワーク（【セッション3】）を行った。

1) 「知見の共有化」に必要なこと

【セッション1】では、森(2004)、市川(1999)を引用し、「どのようにして「知見の共有化」を行うか」「改めて、実践研究とは？」に関し、実践の成果を伝えるために必要なこととは何かを確認した。

2) 実践研究事例の紹介

【セッション2】では、実践研究について事例を概観した。金・武・古屋(2010)を用い、執筆者の一人である古屋フォーラム委員が実践研究の事例について説明した。これを通して、他者に利用可能な形での発信には、自分の実践研究を先行研究の中に位置づけること、分析方法を吟味すること、結果について考察し、自分の見解を示すことの必要性を示した。

3) 実践を伝えるためのプラン作成

【セッション3】では、グループでワークシートに沿って活動を行った。まず、自分の実践の概要をメンバーに紹介し、各々実践で伝えたいことを明確化した。そして、それに必要なデータ、収集方法および分析手法、先行研究と自分の実践の相違点と類似点を見つけるポイント、「考察」を入れる必要性や「考察」とまとめや結論との違いは何か等、実践を研究としてまとめる際に直面すると思われる問題について議論した。続いて、自分の実践を伝えるという想定で、盛り込むべき内容を付箋紙に書きだし、プランを作成した。参加者は、この過程で、発題者およびセッションに加わっていたフォーラム委員に不明なところや不安な点を自由に質問し、作業を進めていった。最後に、このセッションを通して、実践研究の発信にまつわる意識にどのような変化があったかを共有した。

3. 参加者からの声

1) セッションに期待したもの

本セッションに参加した理由として、多くの回答が「実践での疑問や発見を整理、分析、記録しておきたい」「発表もしてみたいが、その手法が分からない」「自分の実践が伝わるかどうか確認したい」「これまで自分の教室実践に注目してもらう機会がなかったので、実践を形にして他者からのフィードバックをもらいたい」といったことを挙げていた。日々の実践を発信する方法を学びたいと考える人が参加したということで、企画の趣旨は伝わっていたと言えよう。

2) 参加して感じたこと

今回のグループワークは、関心領域や現場のタイプが近いメンバー同士で行ったため、お互いの疑問や不安を共有しやすかったのではないと思う。参加者の回答では、「他の人の実践を聞くことができ、その伝え方のいろいろな方法を知ることができた」等、話し合いを通してアイデアが得られたことが主に挙げられていた。また、複数の回答が「自分の頭が整理できた」ことに言及していた。自分の実践の意義と課題は、一人で考えていてもなかなか客観的に見えてこないが、他者に概要を説明してみることで、伝える際の内容の取捨選択が初めてできたということが考えられる。全体を通して、「具体的なアドバイスがあっよかった」「自分の研究に有益だった」等、セッションの内容は、概ね肯定的に受け止められたようである。

しかし、アンケートの回答の中には、「この内容は、研究というものをよく知らない」と難

しい」という声もあった。企画段階から、2つの委員企画セッションの棲み分けなど、どのような参加者に照準を合わせるべきか、議論があった。実際に、参加者の中には、学位論文執筆のために来た、という人もいれば、「研究とはどういうものか、よくわからないから参加した」という人もいた。「先行研究」や「考察」等、いわゆる「論文」によく見られる用語や表現になじみのない参加者にも、違和感がないような説明をもっと心がけるべきだったと反省している。また、発題者が参加者の話し合いに介入するタイミングや進行のし方、そして時間配分についても、改善すべき点として指摘があった。

4. おわりに

アンケートの「もっと詳しく知りたかった点」の回答には、先行研究の調べ方、質的分析に用いられるいくつかの研究方法に見られる違い等、研究を進めるためのテクニカルな問題のほかに、「データの収集が所属機関に許可されない」という問題について、提案やアドバイスを欲しいという回答が複数あった。個人情報の保護が厳しくなっている昨今、データ収集や研究倫理に関する議論は、実践研究に取り組む者にとって非常に重要であろう。今後も、このように実践研究を進める過程で必要な情報、意見交換の場を提供することを検討していきたいと考える。

参考文献

- (1) 市川伸一(1999)「『実践研究』とはどのような研究をさすのか—論文例に対する教心研編集委員の評価の分析—」*The Annual Report of Educational Psychology in Japan*, Vol. 38, pp. 180-187
<https://www.jstage.jst.go.jp/article/arepj1962/38/0/38_180/_pdf>
(2013年7月15日)
- (2) 金龍男・武一美・古屋憲章(2010)「人と人の間にことばが生まれるとき—教師自身による実践研究の意義—」『早稲田日本語教育学』pp. 25-42
<https://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/29805/1/WasedaNihongoKyoikugaku_07_Kim.pdf> (2013年11月5日)
- (3) 森敏昭他(2004)「研究委員会企画シンポジウム3 よりよき実践研究を目指して」*The Annual Report of Educational Psychology in Japan*, Vol. 43, pp. 34-37
<https://www.jstage.jst.go.jp/article/arepj1962/43/0/43_34/_pdf>
(2013年7月15日)